

2021 年度若手研究者共同研究プロジェクト実施報告書

法政大学総長 殿

以下のとおり研究実施報告書を提出します。

基 本 情 報	研究課題名：やり取りを前提とした文章の書き手に影響する要因の解明
	研究代表者 氏名：菊池理紗
	(在籍者) 研究科・専攻・学年： (修了者) 所属・職種：文学部心理学科 兼任講師
	指導教員(所属・職・氏名)： (※在籍者のみ記入)
	共同研究者(所属・職・氏名)：福田由紀 (※指導教員と同人の場合は記入不要)
	その他 研究分担者：
	研究期間： 2021 年度 ～ 2021 年度 (※研究修了年度を記載)
年 間 の 研 究 実 施 概 要	※研究計画の進捗状況を中心に今年度の研究実施状況を記載してください。 これまでの文章産出や作文教育に関する研究では、読み手がその文章を読めば完結する一方向的な文章を対象として、文章をより上手に書くために必要な教育について検討されてきた。しかし、メールや SNS などでは他者とやり取りを行う機会が多いことをふまえると、そのような場面でやり取りされる文章(以下、やり取りを前提とした文章)についても、より未熟な書き手に対する介入方法は検討されるべきである。本研究は、やり取りを前提とした文章において、不慣れた書き手がより好ましい文章を書けるようになるための介入方法を開発することを最終的な目的とし、これを達成するために、メールを書く際に書き手に影響を与える要因の検討を行う。 なお、研究対象は、使用頻度が高く、公私共に利用可能な電子メール(以下、メール)とし、かつ、文章表現により多くの注意を払いやすい公的な場面でやり取りされるメールとする。加えて、今後も関係が続く相手にあてた場合には、書き手は内容・表現により配慮することから、読み手は「関係継続の予期(木村・磯・大坊, 2004)」のある相手に限定する。 本報告書では、2021 年度に実施した実験について述べる。実験の概要は下記の通りである。 目的 関係継続の予期の提示とメールを書く際の注意事項の提示の影響を検討した菊池(2020)の実験方法について、妥当性と信頼性を確認する。 対象 大学 1～4 年生 29 名(男性 9 名, 女性 20 名)。なお、本実験は事前に法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会の上を承を得た(令和 3 年 7 月 8 日, 承認番号: 21-0025)。 実験計画 関係継続の予期の提示(無・有: 参加者間) × メールを書く際の注意事項の提示(無・有: 参加者間) × 測定時期(1 回目・2 回目: 参加者内) の 3 要因混合計画。

方法 実験は、zoom を用いて、オンラインで行った。実験参加者には、PC で zoom に接続させた後、画面共有機能を介して教示を読ませ、その指示に従って 2 回メールを書かせた。なお、1 回目はすべての条件で同一の教示文を用いて書かせ、2 回目のメールを書く際に、関係継続の予期の提示の有無と、注意事項の提示の有無を操作した。参加者が教示を読み、メールを書いている間の zoom の画面を録画・録音し、作成にかかった時間を計測した。産出されたメールは、読み手の立場における好ましき評価尺度（菊池，2021）で評価を行った。

分析 関係継続の予期の提示と注意事項の提示を参加者間、メールの好ましきの測定時期を参加者内要因とした 3 要因混合計画の分散分析を行った。また、メール文章について、KH-Coder 3 を用いて各群のメールにおける特徴語を抽出した。

結果と考察 読み手の立場における好ましき評価尺度の得点において、①配慮の実感因子においては、すべての要因において影響は確認されなかった ($F(1,25)=0.08$, $n.s.$) (図 1)。②適切さの実感因子においては、2 回目の方が 1 回目よりも得点が高かった ($F(1,25)=8.48$, $p<.01$) (図 2)。これらの結果と、参加者がメールを作成する際に考えていたことに対するコメントで、「2 回目だから」「1 回目より」とあったことから、同じ課題で 2 回メールを書かせたことが、参加者に対して文章を修正させることになった可能性が考えられた。

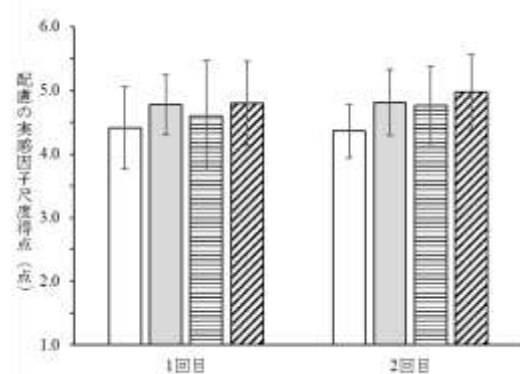


図 1 配慮の実感因子得点

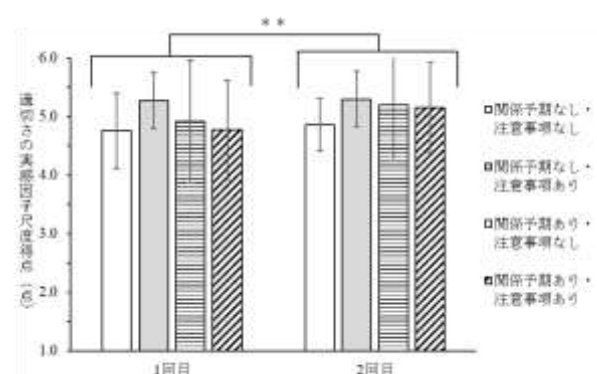


図 2 適切さの実感因子得点

また、各群のメールの本文の特徴語を抽出した結果、③1 回目のメールでは、すべての群で「質問」「困る」など問い合わせを表す語が抽出された。④関係継続の予期を提示した場合は、「お世話 (になっています)」「今後 (とも)」などの読み手への配慮を表す語が抽出された。⑤注意事項を提示した場合は、「こんにちは」「宜しくお願い致します」など、注意事項の一つである挨拶が抽出された。ここから、注意を促されるとその部分を重要視して表現を選んでいることが指摘でき、それは「読み手からのネガティブな評価を回避しよう」という書き手の意識が現れたと考えられる。

今後は、更にデータを増やし、菊池 (2020) の結果と得点比較を行う予定である。また、メールの文章に対してテキストマイニングを行い、文の長さや使用されている語彙と好ましき評価尺度得点との関連を検討する。

引用文献

- 菊池 理紗 (2020). 大学生のメールの好ましきに対する提示情報の影響 日本心理学会第 84 回大会発表論文集 https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/84/0/84_PL-014/_pdf
- 菊池 理紗 (2021). やり取りを前提とした文章における好ましき評価尺度の作成——公的なメールの読み手と書き手の観点から—— 読書科学, 63, 14-27.
- 木村 昌紀・磯 友輝子・大坊 郁夫 (2004). 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 104, 1-6.

研 究 業 績	成果発表（学会・論文・研究会等）		
	学会・論文・研究会等の別	タイトル	発行または発表年月
その他（アピールすることがあればご記入ください。） 2021年度は発表・論文化には至らなかったが、2022年度の教育心理学会で発表を行うことを計画している。			